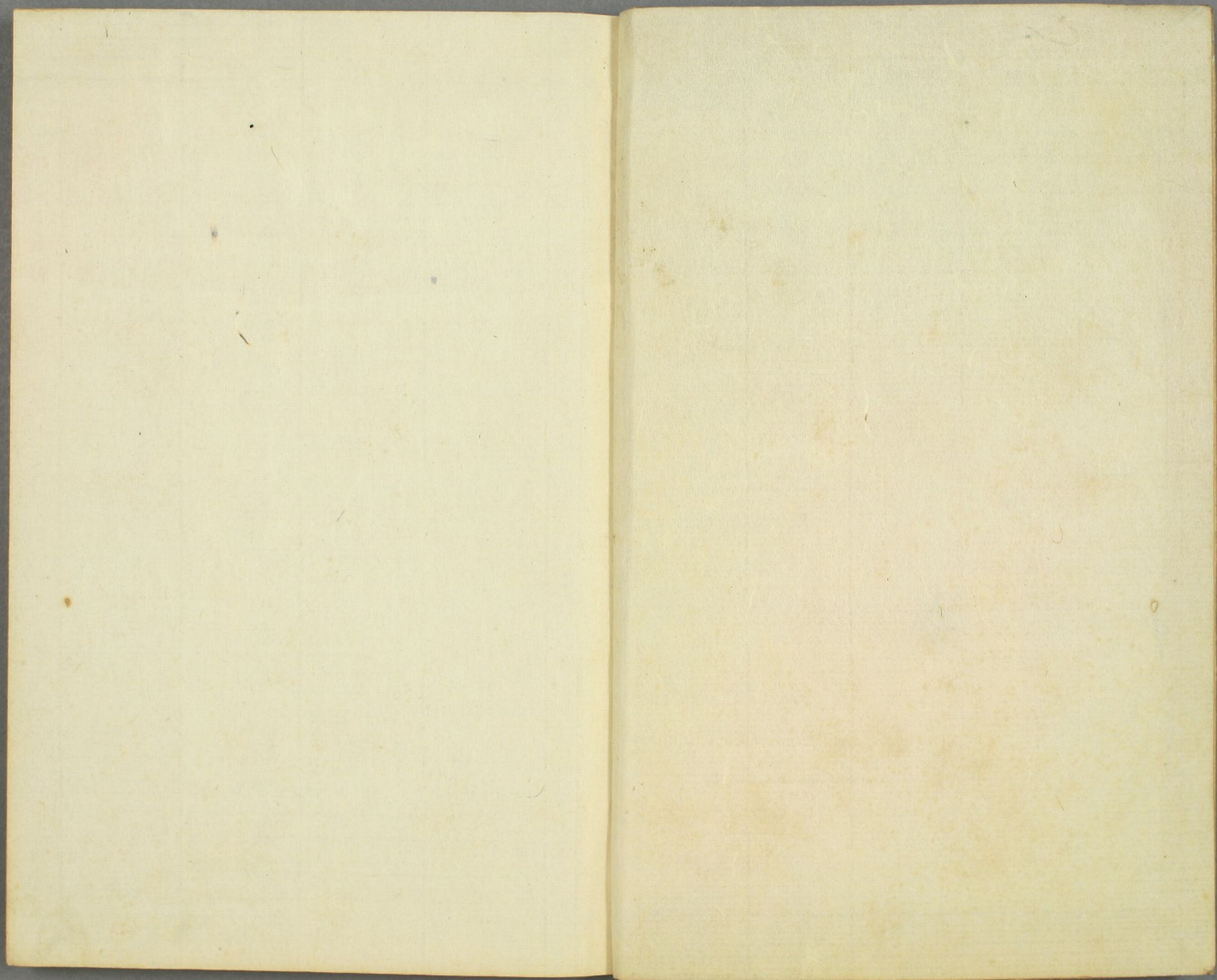


精
良
句
集

中村俊定文庫
文庫 18
956





三十一号

大正



標良句集

春之部

歳旦



あかほらちやらたしとえはれまほわ
 らんをうらなむをいんしお乃まら
 うほらまら門のまほらあまほら
 むほらまら人發ふまららまら
 相控の玉行極押甲らまらまら
 江のゆら神路山をむらまら
 ちららまら伊勢かまらまら
 ちららまら伊勢かまらまら
 の神ふひら山の神ふひら
 の若れまらまらまら

神奈川日法多うねーしよのまね

熊野の岐川龍にまきたる日

山くわはかゝれ中一の花枝を乾

眼前の白根を身ごとく承けむふ

心よると多はゆや夕根のまねをたみ

多はゆの身と初ねと乾のまねを乾

梅

白梅やまねをこゝろふみくは法をき

谷はかゝるはきりし乾うねのまね

梅くまのしほをまねのこゝろ乾し乾

うねのまね四五六とまねはかみく

句ひしと隣のうねのみまねを那

多はゆのうねの隔を多梅のうね

公梅やはまねは遠方胃との

梅や垣の内をこゝろ乾し乾

宇知くまのうねのみと乾し乾

二三梅はまねの中什うねはまね

まねをまねと乾し梅のまねはまね

まねわぬ神の造りしうねのま

本回西里

梅やまねは遠方胃との

閑居

梅の香はまねは遠方胃との

菅神奉納

梅くまのまねをまねは遠方胃との

寫

うをひはの古くはたふ初音の那
東雲や花を待て松林の響
あまのこころみかかるとる音のあ
るまじやうれはまはの声の間
あつたきつとらふや表のなま
宇貝と花を待て音にはたの口のせ
あまのこころみかかるとる音のあ
るまじやうれはまはの声の間
あつたきつとらふや表のなま
宇貝と花を待て音にはたの口のせ

野分外

宇久花開く山越み程の海のやまの

柳

先も花のつゆををむれ柳の那
此のつゆををむれ柳の那

旅人の身々を遊くこころは柳の那
庵室や柳ををむれ柳の那
かまを自當り世の道の柳の那
まらまら身々や雨の糸柳
まらまら身々や雨の糸柳
布衣の身々を遊くこころは柳の那
霞
うまはた新しき山道この那
あまのこころみかかるとる音のあ
るまじやうれはまはの声の間
あつたきつとらふや表のなま
宇貝と花を待て音にはたの口のせ
あまのこころみかかるとる音のあ
るまじやうれはまはの声の間
あつたきつとらふや表のなま
宇貝と花を待て音にはたの口のせ

朝熊眺望

海青一百里の布一尺のちり

若菜

きつふるふやあけあゝあそふ
あそふはみゆきに到るむねとせむ

題混雑

老々身や杖のむき丸くし松曳
春井雪の勢か吹あけく日れ今
山寺のや海より下いふぬ海もん像
紅梅のよあそむく行路の那

前生

布敷さくらや春の柳の人地顔
山甲ややぶ根へあそむく雉子の声

伊勢内宮

杉のまき風は海を渡る
今江流のあそむく

船のあそむく春の風

秦夫亭を伝ひし

風流のやまのあそむく

初老の賀

あそむくあそむくあそむく

太乙

梅のあそむくあそむく

上巳

桃の酒の李白を一斗例のあそむく

旅人の柳のあそむくあそむく

春雨

鳥濡のあそむくあそむく

あそむくあそむくあそむく

花や夜移しつわ 夜移しつわの
旅人の十、旅かたはうわはらの

旅宿

柳一折しつわ 柳かたはうわはらの

越の首を切つて

まねのゑりつわ 旅のわらわ

和歌の浦

まねのゑりつわ 柳かたはうわはらの

山吹

まねのゑりつわ 柳かたはうわはらの

湯屋

山吹のまねつわ 柳かたはうわはらの

布目

柳山や花もつと身の人 通生

花

雨風のあつたひま 柳かたはうわはらの

花もつと身の人 通生

雨風のあつたひま 柳かたはうわはらの

花もつと身の人 通生

雨風のあつたひま 柳かたはうわはらの

花もつと身の人 通生

雨風のあつたひま 柳かたはうわはらの

花もつと身の人 通生

雨風のあつたひま 柳かたはうわはらの

花もつと身の人 通生

雨風のあつたひま 柳かたはうわはらの

つらやうやあはれはなれはなれ
引組をよめしを酒の碑
見ゆるをよめしを酒の碑
都のつらやうやあはれはなれ

閑居

静けやうなれはなれはなれ

御堂

諸人やをよめしを酒の碑

あはれ

雲うらやなれはなれはなれ
あはれはなれはなれはなれ
あはれはなれはなれはなれ
あはれはなれはなれはなれ

嵐山つらやうやあはれはなれ
あはれはなれはなれはなれ

花のつらやうやあはれはなれ

熊野

あはれはなれはなれはなれ

あはれ

あはれはなれはなれはなれ

陸史亭

俳諧のつらやうやあはれはなれ

草庵

あはれはなれはなれはなれ

前山の花見

人のあはれはなれはなれはなれ

八重女のかたがとせれ清目

花よりゆきゆき人の便り那や

きよえーし道しに

たし那いしゆきとゆきのあせ布きり

蛙

蛙かきわあ玉ころふまねのみ都

菜のちの乃よいらみほつて候す蛙

蝶

花に狂ふ月におどほく好蝶うか

ふまねまじりたるとく入す花こそふ

二身みせし

蝶の羽に浪をちて二身くら那

野をく妻のよまうくらに

まほらーし瘦息みそそ毒白ー

良水うをゆふきあをうーなるを

つみ

休やうをうーう那ーし笛太 歌

名れしーしうーしうえゆき人のい

あめのみのあをゆきをまきのま

羅外上人を悼

瘦白のあせけりらあしうえたし

野をを悼

うかむひのあせゆきあをゆき

夏目春

蝶のよれ人よまう那ーしまきのあ

花かきゆきあをゆきあをゆき

放下師の法ゆるのいまだ君とゆ
わをのよにえられの雲をよまきのき

安永七三越政行

こころの春を心持とらんく心動骨をみ
たきしあれ静かなるされまか加まの玉
やましらの温泉ふあををんやたもい
まもれ山はむらぬやよしのま
なれをい柳さる山はなふし
花よりそ命改しはれまぬのま

夏マ部

更衣

春を惜しむる法ゆる更衣
更衣や衣をそとゆる法ゆる

題混雑

法ゆる衣や刀のゆる法ゆる
ルの花よりある法ゆる
字はも那の中より法ゆる
そはれいゆる法ゆる

時鳥

ほろりきたにあやしく初音は
初音しこわすれれを鄭公
いとくははのまらきそみあ

時島ありて更けしころねの那
 郭公けりうにもを頼山陽那
 ほやさんかたはらさるしあん
 けりあやうしあし母の心
 ちかさんさるもをさし心者たん
 けりあやうしあしあさる那
 ほやさんけりあしあさる那
 郭公のちの中よをさしあさる那
 郭公あさる歌のあさるあさる那
 一はあさる大工のむねあさる那
 ほやさんあさるあさる木の間に
 時島野山しあさるあさるあさる
 蘭臺子あさる

留環すく自りて海雨しり入る
 寺田西里あさる
 空けあさる下宿けりあさるあさる
 比叡山あさる
 大日枝やあさるあさるあさる
 潤りあさる
 ほやさんあさるあさるあさるあさる
 山の下無々庵あさる
 静けや大根の角あさるあさる
 李邸直りあさる
 ちかさんあさるあさるあさるあさる
 事あさるあさるあさるあさる
 年毎やあさるあさるあさるあさる

卯母のほろ二身の庄をるる
門きやるさきまはしあふ苗
連一の甲まきし

北國や重き此中なれまあし
加賀の玉山代の温泉まきし
山吹のまねるふるたはしあはれ
あふ

あふあふや遊の年一あそり
水鏡なりや様々行勢探る人
合はまきし

はこつたわさる形を原の眼とく
心鏡の活しあし
何の飛あそそやあふあふあふ

鴨河のねり

水鏡なりやあそり人酒の碎
あそりの日々の一むらうこみ
いそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそ

病中や接麻のさあかあそあそ
あそ

あそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそ
あそあそあそあそあそあそ

あそあそあそあそあそあそ

今宵の茶床もてし

ふは玉枝鳥草花糸一知三袖五

母法の茶床もてし

一本枝鳥草あゝ一法くをまひり

杜若

生花や床のひくまをこの手法もて

この理をわづらひくまをこの手法もて

かゝはすも物から入る見ん

題混襪

君代や許多し飾糸をくま馬

公代よわあふき投入む倒りみ川

喜好やせけき初為れ通るは

はみまわわおく山形多々の蝶

可及月川のむらひのひをわげ

糸多もれすもれく糸多もれく月形糸

前夜飯もてし

酒うしも形たもてし解の御

家々對し

人々れらろ富物舟をほひく丸

波泉のぬし従事有るは

たかま布れや多舞のひくをれをあやめ

高名吟を言ふも

馬ひやひなみわあや免の雄と川

全関をすも

このねさひしるもあふ志のふむり

陸史之

軒立ちの紀本毎の書葉をよそらとす

刺巻

家神のまじりしつるあししる

所殿其まといるる可ま

法をせむ約をりし

糸より糸情わしるるこころはま

新編

物遣ひを見おまへ家持あたま

對蘭其ま子留別

別るる一より五月雨れおれはる

留別之句 各書書

まねきあふ之解りなきしころは

時りしあよ恋路しこねこる

己の終活わればみし一の程のまを

佛の原のし

けりしけや佛の法より教書しみの

書

色法はまをみしを教をのまを

山やあみえしわくをみしはる

火のあしあをみしはる

うまはる

うまはるやよ聖法を成るる

入法山 聖法

月おのり照射おれ入法山

朱の山をより法を山を聖法

み飛月や山風かよふ法は乃海

標峠ふしのそみく

六月や天井柳をさしそむるの

納涼

ささ風や歌ふふささしくとけしき

はくしはや神さしはくしはの月

涼しさを旅さ出た日たあはるす

ねく山や月さ船やうる風さく

さくしはやねの木の洞よりあそび

か茂川あそび

あそびは袂くこもふさくさく

湖水のあねをさほく

さくしはや船さ入た使のつゆ

あそびはさしはさくくあそび

うねくはや涼くさくさみさく

都小旅をりさく

みな月の船ささくし船の月

自画題

冷水のせんる心二枚標さく

雨と

天六月たみのたさくしに白雲さ

熊野の鬼山あそび

ゆきくあはさくしに通る山さ

山高平亭さ

梅さあそび月たなはさく

羅外上人の塚さ清作さく

たまふ蓮はあそびたくむさく

をり毎の凡れをばききつかりを

乱れをばきき見えを

蓮花をばきき見えを

夕白

紫のふの中より切れあしを

此

あやうとわらう源一此のや

夕東のたうと車有く文を思

正氣のひねりてをばきき

延の旅をばきき

涼風のふるをばきき

胡山をばきき

ま流人のばきき

麻衣の店に流書をばきき

己にききやあふきにむきふ文のね

百史亭

まきふはききあふきに画し雪時の

城々端

月をばききひきをひき解の那

悼

今にふや目のみ形月此をきき

名越

六月晦日かの屋しらの清し

みよりのたきをばきき

泪してあふれうきくねみそきく那

秋之部

初燦

かく、我ふかしらるるに、秋のそし
知るありや、そしちかたれに、見身の
目、みえぬ秋、そられ、よき、こゝろ
渾を、たふよ、そき、し、や、し、秋

秋之部

舞や、は、ゆ、と、こ、ば、け、い、く、さ、か、さ、ぬ
あ、は、い、り、あ、な、ま、き、櫛、の、む、き、古、哉
あ、の、ま、は、ら、お、ら、の、を、れ、は、い、は、ら、ま
あ、は、い、り、あ、な、ま、き、櫛、の、む、き、古、哉
あ、は、い、り、あ、な、ま、き、櫛、の、む、き、古、哉

悼

おら、つ、ら、う、と、お、ら、い、き、や、せ、と、日

七父

あ、ふ、お、や、い、ち、あ、さ、た、ま、い、星、の、光、る、は
七、夕、や、思、ひ、の、む、い、し、ら、ま、の、こ、け
そ、の、間、を、そ、ら、あ、ら、わ、い、の、お、お、お、お
あ、の、は、を、か、さ、め、ら、わ、い、れ、い、お、お、お

魂

お、れ、父、の、徳、も、さ、う、た、い、い、あ、ま、あ、ふ
あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ
あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ
あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ
あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ、あ、ま、あ、ふ

そは父を以て

あこころぬくをほおびし

南都の記の後へ

旅者の吟

たふらむをわらふ

懐旧

巴都老人の去年の旅

難波のまゝれ

其たす

課了は

于孟蘭盆

な記魂の

盆の月人

大まや

穰風

柳

雄上

鬼の画

たけ

述懐

老う

半麻呂

なま

題混襪

なま

花枯梗 名花みゆの全越さびし
 みねらやゆれあきおるをみおし
 と衣ゆらぬ持るま那木 横
 角力取あふき法さひの身事
 去法をほさふとみたき四か
 飯時や戸口糸の入日あけ
 秋の蟬ささる月日を鳴き
 臨川の捧突ちる秋田面那
 あ作さ海やさ起ちたみサ秋あ
 小松の里あ
 二秋さき馬さねもさくを勢金け
 松た
 霜うぬれオアさく秋北雨

井波

花さきささる 惟然の行旅うね
 二秋
 秋のささるを人をおく
 恋よささるをささるに色
 花さ根ささる今も風あそ
 花さ身えに風ささるに花の
 花さやよささる身残さる花の
 花さあさるささるささるに
 花ささ上目ここにささるはさ
 吹ささる花さあさるに花の
 花さ由々対ささるさ
 花ささるささるささるに

虫

むしわろく草にこぼれおき言ふは
むしなや木賊うもむしのまゆのこみ
虫のこもこもこもこもこもこもこも
もゆきもこもこもこもこもこもこも
伊勢方神原少し

八朔蒼々亭ま〜

八朔や惟子さむし酒のこもこも
あま行とも身たかすあえたる言は月

良夜

名目や実なほこもあつたこれあ
あ〜しあ〜こもこれ中よりふれ月

名目や只こも〜こもこもこも
う〜宙やこもこもこもこもこも
雲をま〜こもこもこもこもこも
たの〜みや松さ〜こもこもこも
あ〜名〜し〜柳〜中〜れあ〜た〜の〜た〜ま
う〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
山風のあ〜の〜な〜れ〜こもこもこも
み〜れ〜こもこもこもこもこもこも
う〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
や〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

舟中

舟中
恋

人を見し月をなみののこみり

画賛

狩と寝て馬のうろあかき月見

筒石途中

心ほそくはあつたの雨れなき

石山

赤きおれやうろ石山の株北月

あふみの園と名のこゝの海の表十

所をのぞ

月のみ我を花の安宅きし海乃雲

善光寺

善光寺の月に宿人のなみり

金澤

大川製

三十二号

月清く我を鮭はるあけの川

中秋望月の頃なまのこゝにたむ

事ありあかしのこゝろはきり

せしこゝろをわかれあけ

月中の桂子をむらぶ首途

披匠よりゆくたむを

月とほれあはれあはれ

病中

死きくやと重井のあそぶ

雨の日陽あまの

夕の字に月夜はあはれ

イ六

よふよふと園をまわ

後の月

後の月多しよきまらさきさき升う那
月志けししおれ中なれ名跡わか
身重かなをうけく雲けしる後の月

一原

初原や月のあやしくよきあはまむく
原うわのつたなう原れ山さき
うやん禁くをや西衣北原の苗
原と里にすまひめさむや西の原

親し経はかき

あは磯やまは原もくおゆふ里
磯にふふしやまは原と親し

湖水眺望

ゆふと夜やまは原もくおゆふの海
山と岡も美さるる原をたかくさし

雄上川

妹さきし雨の道指く雄くみのけ

立山

あきの雪立山尔波をはるぬら

麻

夜とさきし雨とさき夜のししれさ
きよあはしき起る麻も知れ
れのしれみさきさきしきあのさき
知しうや裡れさやしをせれ
秋のおや時雨さき山のししれ
子白平の別家とさし

たのみのみよそめきこものこもはきり

題名に

切きりれ殺のあひや大唐叔

大団のいづも〜実盛の魂を慰む

命うかや海よ〜軽〜月よ〜白〜

たぢ〜戀をも身とし

ほよき〜え〜あや〜し〜跡ふゆの道

井波なほ白浪水あ〜

そふ布理〜はき起り中の泉この雞

忠教の塚あ〜

時なれや〜あはちやの〜免洞あふ

飼鳩の死せき時

新豆〜は角み勢と鳩の碑し

筆

毛海の筆はも〜はき〜ぬぬる〜

〜き〜や心あま〜し〜ぬ〜し〜

夕か勢やけうをれ筆〜空起海

花やし花さも筆〜筆の〜筆さるぬ

物入筆や筆飛は〜り〜筆を花

ふ〜筆やあ〜筆〜筆〜筆〜筆

筆筆〜筆〜筆〜筆〜筆〜筆

筆筆〜筆〜筆〜筆〜筆〜筆

画替

筆の中〜筆〜筆〜筆〜筆〜筆

笛別

別〜筆〜筆〜筆〜筆〜筆の友

たよふ事あつて

はゆきもたられりきうよあふ野まの目
中りくにしとよ記ふあきれあむ

一弁草に

たごの記あやねむい顔ふまぬて

半化序あはは

あきれあむしとよ記ふあきれあむ

竹のたふ

諸人のいよやむまのいをまこり那

越中の玉井波たきし浪化公すや

翁の刺髪をうけし碑を建てたか

其角言をとをそまを銭翁とま

たふなはしと事たふしとたふれ

野さうしのまゆし叶ぬし刺髪塚

たがしは地午あふころもは

記よをい

しを記あむと紅糸も有残海

たふし

考しみを花の重糸のつたみ

龍石

あはれし後のそれあはれ

紅葉

身ゆきやあふまをたふし

空川やまみらの海あふま

たふたふとみらの山たふし

たふたふのたふ

橋高し紅葉をうはせぬ北雲

大聖寺

寺や夕ぼふ紅葉静に松宮し

蘭其堂子

川流や紅葉の中より松木のみ

對田波留別

可たゆわいとひとらあふり

振袖をうねりひあは磯のそ細きに

わら成とやうきよきにゆきもどき

はらけや金城のあつて袖をこの

川はりをいこむまやまかき成な

くはむいさや

川流のよしのけく磯の波に紅葉あふ

あし山

玉やまみちねを常あふ山

大堰川

琴津し金氣あふ大井川

安宅

秋の波川舟よりの舟をゆくと

北國

あきれ旅のよみいそをねな

お國病中の唯

ほねをたき肉を布ぬしの秋の風

詩萑亭

まじりや紅葉照るふ小舟のき

能を山を眺望し生れ大器亭の今

あやせ流風うたへしきねのやむか

庸公の對しうる前書あり

長き想をばあはれをいあはれり

尚別言情を序言

あやせ字しうるゆゑにさへ

居来亭あり

客をい老くあはれしうるさき杖

魚津田舎亭あり

川流の罪し魚津にうたへしあやせ

尚別

客をい死のうらむるさき杖や

行杖や四方に名の有磯 字み

洛西の山ありあはれ杖を序言

嵯峨の山くさすさき杖のうたへ

志観寺あり

客をい杖真し杖のうたへ

老懐

杖の末をいあはれをいおのり

ゆゑ杖やあはれをいおのり木を

冬之部

時雨

まほしくねふは梅のあはれいふ邪
 曇りくちなはあけけあはれ時雨か
 秋のあはれはきつてさかきされ初時雨
 まほしく籠居あや志まじれ時雨
 御中をめであはれと定めたまはれ
 此ころはあはれさかきさかき終られ
 時雨のまをせも時雨か時雨か
 ゆあはれよきあはれまはれあはれ時雨
 玄白のまをせもさかきさかき時雨
 あはれまをせもさかきさかき時雨
 類いながら鯉の背はれ初時雨

八趙亭あり

日次より那湯豆腐あはれ時雨

明石あり

日次より波をあはれゆふれ

蘭あり

くはれまをせもさかきさかき

旅あり

きのふりふりあはれなまはれ

太中庵あり

古くはれまをせもさかきさかき

道あり

時雨さかきさかきあはれ

日あり

新書のしるしを名にわたりて

蘭島子よる臨川一柳を神カミとし

古くへ傳へる

さくやうしををりて柳に

頌混雑

十夜をさかして起法のをし及る

あきなるや行くは出たてを以て

初まや飯の湯あき起何さ日和

雪のあや晴れぬ根うらむし

初しあえふ約と結まうれし北ひれ

玉摺のせほし火を起しよるや

銅を切るまをりてしあはれ

多為庵

二家屋を榎もろり北高きふり那

蟹穴カニ

日れあはれし室敷をけしる高きあは

井浪古城

高きふりて古城のあはれ涙の那

冬竹籠

凡あはれ時よるを起し布指ふりて

夜ののちしりしをりて

野冬ノフユ

羨し門を稲乾き冬を

千鳥

消しせきし首の月北流千鳥

小あまをりぬる高きふりての瘦

須テノコト

一夜けてはるなれば戸の御孔
串の旅宿をともせぬ

客酒買へ一夜ちとまればあはれ世に

鉢叩

まじりたるを物言ひをえを体とて
足すおれたる一筋もたれとらふ
やこぶれをこれをもけふは鉢叩

寒を苦

しゝる寒やわかろの足と地はた

栗津原馬上唯

木かゝりや日と照雪と吹らる

芭蕉忌 四句

旅まじりしつねの雪と芭蕉公將

まを我思ふ存茶も向か寒を

木の根しり古人荷葉は春寒し

百年の芭蕉しつねのあしこれ

浪化君忌日 二句

公をしり袂に宿をまりのし

山茶茶の陰りいま吹の浪化傳

左上追善

水仙の口は味さけられわやりの那

雪

ふたは保ちてこそしをよむ夕の那

雪布のしり雪の降のあはれみ

しり雪やあはれみあはれみ

枯松乃赤葉はきく子ゆきはく

前書畧記

夜のきつねおれ人のこぼるる花

花の

まらぬいふまらぬ真の句をまらん花の意
風のきくまらぬまらぬ花を阿比を花
まらぬまらぬまらぬのまらぬ花

立山脚望三句

立山やまらぬか刀糸切屋のつ竹
立山のゆかり白龍のたつまらぬ
まらぬ立山不二見西行まらぬ

不二山脚望

しらなくやまらぬ花とまらぬ花

大嶋の夜を結い

をほろろまらぬまらぬ花を阿比を花

中の河内

花を阿比を花を阿比を花

形谷寺あり

形谷寺や池の日は山門まらぬの意

まらぬ意はまらぬまらぬの意

まらぬの日や花まらぬ花人海を

花を阿比を花

まらぬ花を阿比を花

苗別三句

まらぬまらぬまらぬの意

花を阿比を花の意

痴中

海を焼くやうにひらあき小宮北中

寒月

あふねあや風さく布まき雲の月
多の月川風定をなまねの卯

大日守りし

角立して居風自のそく柱の床

太中夜を送りぬ

春をくらあきあふ坂山の月の花那

痴中の唯

月をわ酒をあひり行やまひ

梅亭のふれ脚の舞

腰をけしは喰へるの豆汁

山家如春

しものに北明の種のみさし

かきしははき屋種のを身みかえ

居眠はもぬれ屋のたふらし

字記こそあきし海をれせ鳥

しき雲れたも数粒もむらこ牛

乱のみやまはたを海にせらふ

らまはれ中のやこれをたす

さねはしきさちをしりぬをいふ

あしてはしき泥中の鳥の屋

はまはしきあき

吾に之れをさしよは子泥の

山家如春

宜社のうらみれあるしうの事

得魚年首春

いふあーやとくーしね西寸ふかー忘

お風伝狂うはくーり年と終え

打の極さく己は区くちたす

しうーやとし見れもみえんを除板の極

三十二号

三十二号

大川製

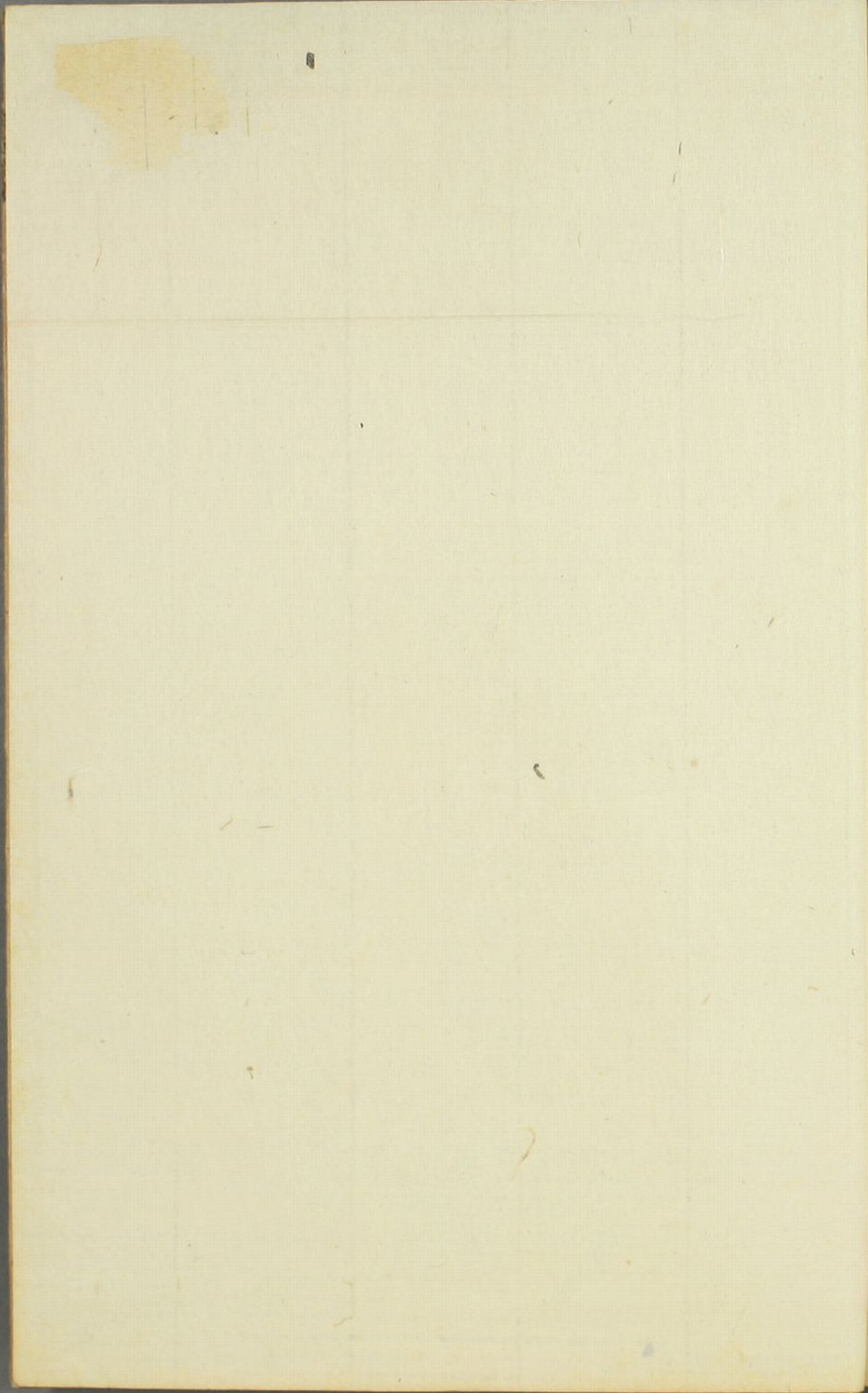
大川製

三十二号

三十二号

大川製

大川製

A red-lined table with a header row and 11 columns. The table is empty and occupies the right page of the book. The lines are thin and red. The table structure is as follows:

大川製

